

三菱帝國

三菱は国家なり

——治外法権のもと絶対によりかかりとおる三菱憲法——
 あなたの三菱、世界の三菱。

原子力・航空機・戦車・ミサイルから
 飲料自動販売機にいたるまで

すべての生活に入りこむスリーダイヤ
 その巨大独占企業の生産と組織をささえる

職制機構・社員教育・管理体制の
 思想と行動とその実際……

四人に一人の管理者群と同盟重工労組が
 一体となつてくりひろげる

気の遠くなるようなピラミッド支配、
 その神話の崩れるときは……

今崎暁巳著

神話



労働旬報社

巨大独占企業の現場・労働者群



三菱帝国の神話

巨大独占企業の現場・労働者群

今崎 暁巳著

労働旬報社

序章 三菱は国家なり——神話を支える巨大企業の実相と体質

- 1 ワレ^レ聖域^クノ潜入ニ成功セリ……………三
- 2 工場も街も三菱のもの……………三
- 3 治外法権下の思想と行動……………三
- 4 巨大な三菱の傘のもとで——あの日から生まれた亀裂……………三

第一章 人間・職場破壊の十年

——分裂が職場と労働者にもたらしたもの

- I 巨大独占・三菱が労働組合を襲った時……………四
- 1 水鳥の羽音に驚くが如く——苦悩にゆがむ幹部たち……………四
- 2 私はこうしてふみとどまった——嵐をこえた平組合員の動機……………四
同僚の死／親子の連帯／おれはまちがってねえ！／
分裂がもたらした合理化・災害・死亡事故の激増
- II 自殺・ノイローゼ・人間不信・競争……………三
——なにがどう進んできたか

- 1 機械を奪われてっていいした差別——近松の場合……………三三
 天皇と三菱の悪口は許さん——二十年前の私／旋盤
 にかけて男から奪う機械／喫煙・便所・立話……す
 べて監視／入水自殺をこえた日に
- 2 三菱の力で罪人にされ——犬塚の場合……………六二
 おしつけられた無実の責任／明らかな事件の背景と
 デッチ上げ／こげんインチキなインテリに敗けてた
 まるか
- 3 こんな汚なことを……同盟重工労組のやりくち……………七三
 ——〇と日の場合
 どうもおかしい、破壊分子、／出はじめた自分たち
 の重工労組への疑問／ひきずりおろされた組合役員
 選挙
- 4 人間をとりもどすたか——村里の場合……………八三
 呼吸することも管理され／踏みじられた青春の日
 々に——分裂の痛み／汚染基準の二万三千倍の汚れ
 た職場を変えよう／親友・兄弟を奪われても——人
 間をとりもどそう

Ⅲ 会社・新労一体の支配体制の柱…………… 六四

——職場・地域・青年支配のしかけ

1 職場支配の「新従業員制度」の効用…………… 六四

2 地域・家庭・遊びをがんじがらめに…………… 六九

Ⅳ 三菱は「分裂」でなにを狙ったのか——分裂

の背景とねらい…………… 一〇四

1 よみがえる巨人——三重工合併・合理化・第三次防獲得… 一〇四

2 世界の三菱の邪魔者は消せ——兵器生産非協力、

臨時工の本工化、労災防止の分会…………… 一〇七

3 全造船内の右翼グループ二八会の活動…………… 一一〇

4 十四項目合理化がもたらしたもの…………… 一一三

5 分裂の大津波のあとにくるもの…………… 一二六

——巨大企業と一体の同盟重機労連

第二章 三菱帝国の支配のアミ

——ピラミッド支配を支える考え方・組織とその実践

I 支配のアミのホコロビと再編強化 …………… 三三

1 矛盾の導火線——激しい企業選挙の強要…………… 三三

たまった七年間の不満／大衝擊—民社党の大幅後退

2 反撃に移りはじめた全造船のうごき…………… 三七

函館ドックなど反撃開始／同盟重工労組から一挙に

二十五名の復帰者

3 ホコロビ——同盟重工労組の自由選挙事件…………… 三三

——あらゆる迫害をけて三三票の良心

ゼニカネより自由が欲しい／迫害にたえた三十人の

推せん人／ギリギリの抵抗——五人に一人が三菱・

重工労組拒否の投票

II 新労批判票三千票あぶり出し作戦 …………… 四三

——職場支配の実態

1 犯人わりだしのしかけ…………… 四三

2 のぞましい労働者の姿——作業長の個人別評価表の実際…………… 四七

点検項目と評価の実際／三菱がねらう労働者像——

ランクの中から

3	職場づくり・人間づくりの実際―監督職の研修内容から……	一五
III	支配の組織―『友愛会』・地域組織……	一五

1	新しい差別と支配体制―徹底した人権差別の実際……	一五
---	--------------------------	----

危険人物をあらゆる場から叩き出す／分会員を孤立させる三つの形態・プライバシーの中へも

2	労働者を二十四時間監視する組織―『友愛会』……	一六
3	地域組織を選挙で固める！……	一六

身近に感じる日常のつながり／一石三鳥の選挙活動

―労務管理のバロメーター

IV	新労一万五千を支えるもの……	一七
----	----------------	----

1	豊富な新労組合員の利益……	一七
---	---------------	----

出世・仕事・給料・出張……その他のトクの実際／

住宅資金・結婚・レクリエーション―なんで分会に

いくのかな

2	三菱マンの誇りと生きがい……	一七
---	----------------	----

私は三菱に生命をかけます―のぼり旗で村中祝っ

た。三菱様へへの入社

- 3 三菱の技術と伝統へのゆるぎない自信……………一八三
 生きがいはどうつかませるか／どうせ三菱の社員は
 アウトサイダーとして生きるわけにいきません

V 三菱と仕事に生きがいを燃やす社内教育……………一八七

- 1 労使一体の見事な教育体制……………一八七
 2 潜在パワーを引出し燃える人間集団をつくれ！……………一九三
 日常二十人の班員を一瞬たりとはなさない／感動
 ある職場を——労働者の心をつかむ熱気のみちて
 3 極端に狂暴となる対分会教育……………一九六

VI 重症患者は警察にまかせろ……………二〇三

- 1 五つのランクと三つの種類の区分け……………二〇三
 2 中期感染者への対症療法の実際……………二〇四
 ——直属の係長・作業長・家族・保証人
 3 親・保証人の圧力がきかないのは公安関係へ……………二〇六

VII 憎悪と暴力の嵐をこえて……………二〇九

第三章

人間の働く職場めざして

——不況・合理化下で変りはじめる職場

I 不況・大合理化下の激流のなかで……………三二五

- 1 またも徹底したしわよせ——不況対策……………三二五
- 2 時間に追いまくられ——変った現場……………三二七
- 3 ますます強まる監視と、踏み絵……………三三一
- 4 人間をおしころす職場を変えよう……………三三四
——ピラ・職場ニュース・ハンドマイクの宣伝
- 5 沈滞を破るキッカケ——労災事故・差別事件での勝利……………三三六

- 1 激しい妨害をこえて再び自由立候補闘争……………三〇九
- 2 集団暴力による選挙妨害の実際……………三一一
- 3 読んだ。後たのむ——便所の壁へ連帯のサイン……………三二四
——同盟重工労組員から村里への手紙
- 4 犬塚裁判の勝利——分会のたたかいに希望の灯……………三二六
- 5 すべての権利侵害をはねかえすたたかいへ……………三二八
——差別・不当労働行為・人権侵害の提訴へ

II 三菱の底辺を支えた果てに……………二四三

——まず下請けを叩っ切れ

1 十五年勤めて退職金五万円・全員解雇……………二四三

2 事故で死ぬのめたいがい下請けです……………二四四

3 首はつながっていても……………二四六

——まともに働いて五十男で八万円

4 下請け労働者は分会に期待する……………二四九

III 二万円の差別うけても分会がいい……………二五〇

——復帰者のねがい

1 選挙がたまらん……………二五〇

2 分会にはある思想・信条の自由……………二五三

——復帰した創価学会員

3 気づきはじめた、分会員のように生きる良さ……………二五七

4 緊張して疑って……作業長の悩み……………二五九

IV 人間の働く職場を目指して……………二六二

1 生命と安全を守るたたかい……………二六三

V

2	オイはばかでもけだものでもなかです……………	二六五
	——ものもいえない同盟重工労組員の気持	
3	人間は自由にノビノビ生きたいのだ……………	二七〇
4	アキレス腱は三菱自身の管理の壁の中に……………	二七四
	三菱の暗黒支配が明るみになる時……………	二八〇

V

1	三菱のやり口を白日にさらそう……………	二八〇
	——人権・昇給昇格差別・既得権剝奪の数々	
2	大きな意義——勝利した不当配転……………	二八三
3	苦しみの根源に確実に弾が打たれはじめた……………	二八六
4	三菱城下町異変……………	二八九
	——三菱を告発する市民集会	
	たたかい抜いた心を若者たちに……………	二九三
	——働く者の誇れる三菱・長崎をつくるのだ	

序章 三菱は国家なり

——神話を支える巨大企業の実相と体質

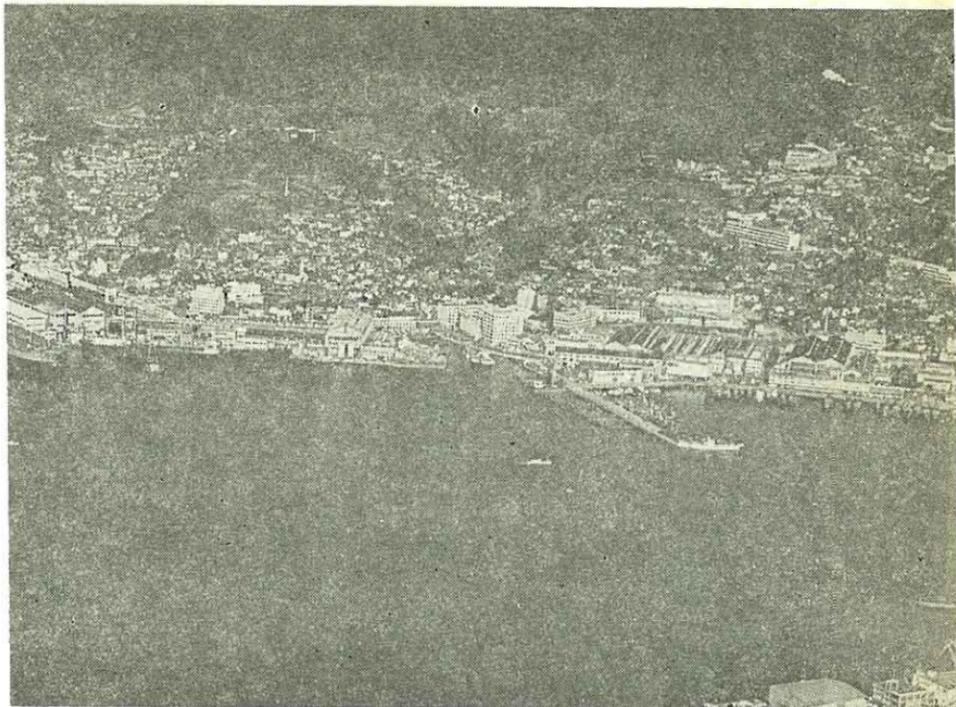
1 ワレ “聖域”ノ潜入ニ成功セリ

——閉ざされた社会——世界一の造船所

私は一九七五年の十二月のある日、長崎の岩瀬道の丘にそびえる白亜の超近代ビルの前に立っていた。日本最大の企業グループ「三菱」の拠点、三菱重工長崎造船所の正門受付である。にぶい冬の光の中に、十階建てずしりと重い安定感のある白一色の建築物が、屋上に「三菱」の象徴であるスリーダイヤのマークをつけて、長崎の街と造船所を威圧するように立っている。スリーダイヤのマークは、屋上の建築物の四方の壁面に張りつけてあるので、丘の上から見ようと、港の遊覧船の上から見ようと、どこからでも「三菱」の象徴が拝めるようにつくってあるのだ。

四十年輩、眼付の鋭い、制服の守衛が、うさんくさそうに私たちを見ている。私たちの一行は、巨大造船所に人生をかける一人の若者を主人公とする映画『あしたの火花』の製作スタッフである。戦後三十年、日本のたたかう人びとの映画を作りつけてきたプロデューサー伊藤武郎氏と野原嘉一郎氏、監督の橋祐典氏、そして、私の四人。さらに、私たちを案内してくれた全造船労働組合本部の小川善作氏と総評全造船労働組合三菱支部長船分会書記長片山明吉氏。この長船分会という労働組合は、一万五千三百人の従業員の中で、三百五十人の人びとが、差別と弾圧に屈せずたたかひの旗をかかげつづける労働者の組織である。

守衛たちの視線に敵意がこもってもおかしくない顔ぶれなのだ。三菱は、この十年間、この全



すべて「世界の三菱。のために」——長崎造船所全景

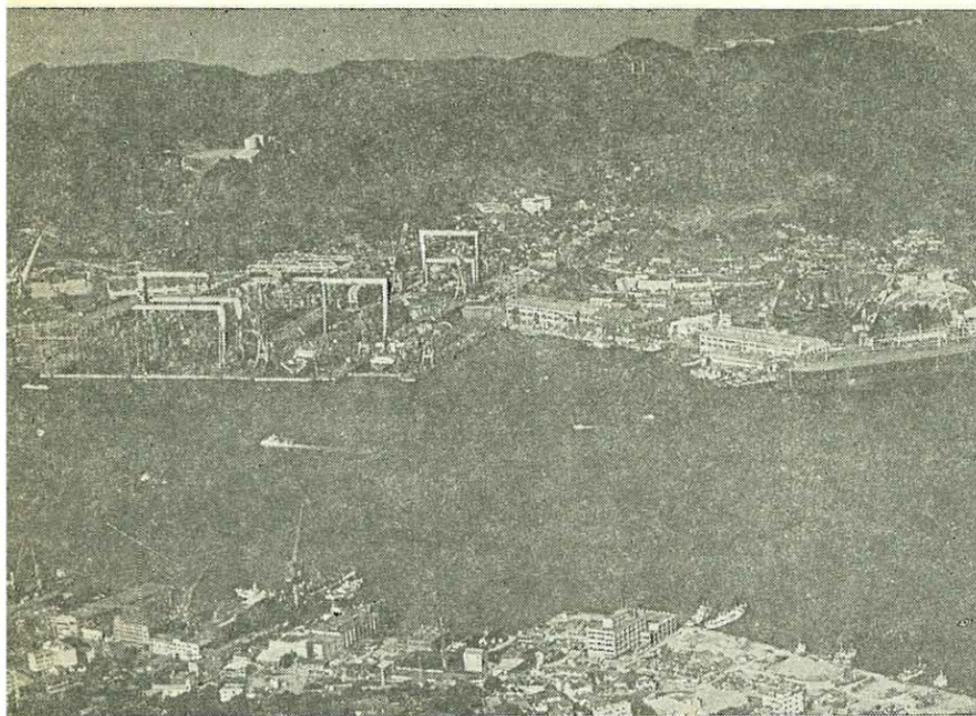
造船長船分会という組織を叩きつぶすことを社内政策の最大目的にしてきたし、そのために、会社お気に入り分裂組合、同盟造船重機労連三菱長船支部（新労）を育成してきたのだから。

係長の肩書をもつ職員が姿を現わして、丁寧な口調でいった。

「作業中ですから、自由にとりわけにはいきませんが、係の者に車で案内させますから」

思ったより、素直に、所内見学の希望が入れられたことに驚いたけれど、その気持は、すぐぶち壊されることになった。

「あそこに見えますのが、片方で三百トン、二つあわせて、六百トンの鉄ブロックを運搬することができます、ゴライヤスクレーンでございます。香焼



長崎の街も港も自然も……そして人間も、

工場には、倍の六百トン、合わせて千二百トンを運ぶ、最大のゴライヤスクレーンがごさいます」

スラリとのびた手足、キレイな顔のお嬢さんの説明をききながら、造船所構内を案内された。ゆったりした中型車のソファに坐って、気持よく窓から外を眺めた。車があまりスイスイ走るので、作業中のブロックの側で車を止めて、外に出て見せて欲しいと案内嬢に要求した。美しい声で答えが返ってきた。

「作業中は大変危険でございまして、ヘルメットなしで、車外に出ることは禁止されております」

みんな、お嬢さんのソフトな禁止命令に啞然として、二の句がつけなかった。そんな馬鹿な、こんな籠の鳥のよ

うな工場見学があるものかと怒鳴りたかったが、職分に忠実な、長崎娘の天真らんまんな顔を見ていると、戦意をそう失し、あらためて大三菱のいんぎん無礼な人間の扱いに苦笑した。

かくて、車二台を連ねて、わずか三十分ほどの、籠の鳥見学は終わった。初めての造船所見学に胸はずませた私の期待はみごとに打ち砕かれ、労働者の働く姿も機械の名前もロクに見えないうちに、ていよく門の外に追いだされた。

「畜生！ こんなことで引き退るか！」

私の腹の底から、初めて怒りの感情がふきあげてきた。私は、この時、その前日に会った三菱の差別政策の中で十年間たたかいつづけてきた労働者たちの姿を、その労働の現場で、しっかりと眼の底に焼きつけておきたかったのだ。労働現場を知らない私にとって、それはドラマづくりのために必要な、最低の現場体験でもあった。

私はあきらめなかった。

年が明けて、二度目の長崎取材の時、もう一度、造船所潜入をこころみた。「潜入」などという表現を使うのは面白くないのだが。

私は、労働現場をできるだけよくみることに、ひどい差別を受けている何人かの人たちに現場で会う、あるいは、みることに、取材の目標をしばった。そこには、これまで知ることのできなかった大企業の間支配、職場支配の労務管理が生きて存在しているからだ。私は分会員に限らず、知り合いの三菱マンの知恵をかりて、やっと数日後に、その目的を達することができた。

序章 三菱は国家なり

私はその日、嬉しさを抑えて、作業衣、ヘルメット姿で、立神^{たかがき}、向島^{むかしま}、鮑^{あき}の浦と、主要な作業現場を歩きまわった。立神の造船組立現場では、三菱の現場規律の象徴である、体操の様子をみる事ができた。

労働者は、コンクリートに一定の間隔をおいて書かれた○印の上で、ラジオ体操の音楽に合わせて、動いていた。班の位置も班内の自分の位置も固定され、先頭のリーダーが「一、二、一、二」と大きな声で叫ぶのに合わせて手足を動かすのだが、よくみると、動きが音楽に合っていないし、なんとなくにぶい。

この無表情で、精気のない体操が、なにを意味するのか、ずっと取材が進む中で、わかってきたけれど、その時は、巨大なクレーンや機械の動きに比べて、ひどく人間がみすばらしくみえた印象が強く残った。

分会現委員長で、ひどい仕事差別を受けている中村さんの事務所に行こうとしたが、入口に職制三人ほどが立話をしていて、目的達成は不可能だった。あきらめて帰ろうとした時、偶然、やはり、何一つ仕事を与えられないで十年間頑張っている元委員長川宿田^{かほしゆだ}氏の姿を見た。川宿田さんは分会掲示板の前に立ち、じっくりピラを読み、両手を大きく振るようにして、ゆっくり大股で歩き始めた。血色のいい丸顔に眼鏡をかけた顔は、前方をはったと見つめて歩く。すれちがう職制が眼をそらし、よけるようにして通り過ぎた。

川宿田氏の作業服もヘルメットもピカピカに光って、汚れ一つない。仕事を何一つ与えられないから当然のことなのだ。川宿田さんは胸をはって歩く。毎日、現場をみて歩き、顔見知りにな

うと気軽に「やあ」と手をあげる。それは、中年以上の人ならよく知っている、元分会委員長の日課なのだ。会社は何一ついわない。もし、文句をいえば、川宿田氏に、胸をはって「仕事をよこしなさい」といわれることを知っているのだ。中村氏にしろ、川宿田氏にしろ、三菱は、この新労の人たちの中にも支持者の少なくない、分会幹部を、そっと飼ひ殺しにして、停年で追いだそうという作戦をとっているのだ。

塗装のペンキでひどく汚れた作業衣のおばさん二人がそろって、深々と、川宿田氏に頭を下げて通り過ぎた。川宿田氏の眼に、深い欲びと感謝の色が浮かんでいた。

数日後、私は、原爆投下中心地浦上に近い、幸町工場に潜入することに成功した。この時、私を案内してくれたのは、ある会社側職制であるだけ書いておこう。なにしろ、これ以後にあつたさまざまな人たちの話も、特定の分会員を除けば、できる限り、名前をかえたり、事実もいくらか隠したりしなければならぬのが現実なのだ。この本に登場願う人びとに、さらに妨害や弾圧がおよぶことを極力避けるようにしたいから。

幸町工場は三菱長崎造船所の中でも、特殊な位置にある工場である。船舶用のボイラー・タービンなど大型製品は飽の浦など本工場で作り、ここでは、油水处理装置など、補助的な機械と同時に、魚雷やミサイル機器など、自衛隊御用の兵器生産を行なっているのだ。三菱重工は今、ジェット戦闘機・ヘリコプター・戦闘爆撃機・核弾頭を装備できる誘導ロケット「ホーク」および「ナイキ・ハーキュリーズ」など、国産軍事兵器の重要な部分を生産している。そして、名古屋工場や東京下丸子工場などととも、日本の防衛生産の先頭を行く、三菱の主力兵器生産工場の

一つが、この幸町工場なのだ。いってみれば、ミサイルの外側をここで作って、中身は隣の三菱電機で作るということ。

特殊機械部工作一課、工作二課。そして、金網で外側を囲い、入口も小さなドアで出入りが自由にできないT—¹工場——ここでは、防衛機密に属するような、兵器の生産や開発が行なわれており、会社はここから、分会員を全員締め出す方針を実行してきており、世界一の香焼新工場からの分会員締め出しと並んで、三菱の労働者支配、差別支配の体質やその根本がこの軍需生産体制にあることを教えてくれる。

私は案内者に頼んでちょっと、中をのぞいたが、あまり深入りするわけにはいかなかった。時間がもう昼休み間近だったので、目指す近松さんや浦上地区長の和田さんたちの働いている工場に入った。

近松さんの姿はすぐみつかった。なにか、工具類の点検、整備をしているようだった。特徴のあるちぢれ毛を作業帽で包み、熱心に点検している。それが終わると、帯を手にして床に落ちているゴミを掃きとった。

私は、数日前、近松さんから十年間の差別の話をきいた。機械三十年、一筋に生きてきた人間が、機械をとりあげられたら、どんな気持ちになるものか、酒も飲まず、お茶をすすりながら、近松さんは半生を語ってくれた。私は、その時、不思議な明るさを近松さんのすべてから感じた。長崎弁でふき出すように、十年の一コマ一コマを話す、その言葉のたしかさと行動的な人柄。外来者である私に緊張している奥さんをいたわりながら話す心づかい。そして成長した三人の子ど

もたちについて語る時の希望の色。家も新しいし若さが溢れている、ここには、たしかに胸を張って生きている家族と人間の連帯がある……私は、その時、近松さんという、五十四歳、勤続三十年、機械一筋、分会一筋で生きぬいた労働者の明るさと行動力と楽天性をみたように思った。

だが、私には、まだよくわからないものがあつた。なんだかこの明るさは虚勢ではないか、痛めつけられた人間が見せる奇妙な明るさ、ゴケの頑張りではないかとも思った。一万五千人の労働者のほとんどが、新労と会社に忠誠を誓って作られているようにみえる三菱の組織と秩序の中で、たとえどう頑張ってみても、しょせん抵抗は大海の中の泡のような現象でしかないのではないか——こう考えるのは、恐らく、私だけでなく、普通の人の平均的思考だと思う。そして、当事者である、三百五十人の分会員の中にも、「もう勝負はあつた」「年寄りの頑張りに過ぎん」といった感想を私にもらす人もいるのだ。

私はとにかく、この眼でみたかつたのだ。この幸町工場で、近松さんをふくめ、五十人の分会員が、懸命に力を寄せ合い頑張っている姿を。

たしかに、間違いなく、近松さんは職場にいた。組合分裂後、愛用の機械をとりあげられ、今は、帚で床をはき、部品工具を整備し、同僚たちのために黙って一心不乱に働いていた。その姿から、私はなにかしら、欲びや悲しみをこえた強烈な力を感じた。その力がなんなのか、私は、とにかく、この事実を人びとに伝えたいと、その時、決意した。私が、今、この三菱長崎造船所の中で繰り広げられている日々の人間の葛藤をどのように伝え、そこに生きぬく人間の十年を、どのように語れるか、そこから、なにか一つ、現在を生きぬく、手がかりがつかめはしないか、

そう思った。

2 工場も街も三菱のもの

私は、造船労働者のおかれた状況を知るために、他のいくつかの造船所や町を訪ねた。どこにいても、造船所は、その町の歴史をつくり、経済活動の重要な柱となり、若者の安心して頼れる就職口となり、明治以後百年余の風雪の中で、その地方住民の血肉となり、切っても切れない生産と生活の世界として、存在している。いいにつけ、悪いにつけ、海を通じて、世界につながっていった海洋国日本の港町は、大かれ少なかれ、港と造船所にまつわる、生活のしがらみを持ちつづけてきたのだ。函館ドックあつての函館の町、浦賀ドックあつての横須賀の町、石川島造船所（現在の石川島播磨）あつての東京下町など、戦前戦中だけでなく、今なお、その地域を代表する産業として、地域生活に大きな影響力をもっている。

だが、長崎の町と市民にたいする三菱の力ほど、大きく徹底した影響力をもったものがほかにあるだろうか。

現在、三菱社員の数約一万五千人、家族含めて七万人。これだけで長崎市の人口四十二万人の十七%ほど。下請け企業や関連会社を含めれば、なんらかの意味で、三菱の傘の下で暮している人の数は、恐らく、市の人口の三分の一にはなるだろうし、会社と社員の払う税金は市税の約二十%、三菱の使う電力は市全体の約二十%、長崎港の輸出高の約九十%以上を三菱製品が占めて

いることなどを合わせてみると、長崎に占める三菱の位置は明らかである。だが、それ以上に大きく目に見えない力は、安政二年に徳川幕府鑛鉄所として始まって以来、百二十年にわたって、長崎と日本の歴史をつくり、三代、四代の人間の生活をつくりつづけてきた、日本一の巨大企業そのものの中にあるのだ。日清・日露、第一次・第二次大戦とつづいた戦争の中で、たえず襲ってくる好況不況の波の中で、いつも、長崎と九州の人びとは、三菱長崎造船所の一挙手一投足とともに生きてきたといつて間違いない。

国家とともに、日本の近代をつくってきたこの三菱の世界には、一つの治外法権あるいは三菱憲法といった力さえ存在し、私のような人間が自由に取材することもできない状況が生まれる。

他の造船所では、こんなことはなかった。函館ドックでは、分会幹部の方たちとともにヘルメット、作業衣をつけ、作業工程に従い、質問しながら作業現場を見学させてもらうことができたし、大きな内燃機関を塔載する現場に立ちあうこともできた。雪の中の青函連絡船の進水式も見せてもらった。また、瀬戸内海の美しい島にある笠戸造船所では、作業靴から、脚の装備まで、すべて、労働者と同じ姿で、修繕船のデッキの上へのぼり、高所恐怖症の私にとって、外業作業がいかに生命をかけた仕事場であるかを実感をもって味あわせてもらった。

前日会った、二十二歳の溶接労働者が、「おれの作業現場に来て下さい」といった言葉が忘れられず、船の最先端、穴をくぐってやっともぐりこめる、小さなブロックの作業現場にまでたどりつき、その青年と再会できたのも嬉しかった。そして、私のために溶接作業を見せてくれた若者の澄んだ笑顔が忘れられない。小さな暗闇の中の強烈なアークの光、立ちこめる煙のすさまじ

さ、マスクはまたたく間に色がつく。そして隣のブロックでつかっている機械のすさまじい騒音——眼をやられ、耳をやられ、肺をやられ、腰をやられ、またたく間に、人間の肉体をおしやかにしてしまふ作業の実態をいくらかでも知ることができた。

函館ドックや笠戸造船は、会社側の攻撃をはね返して全造船分会が、労働者の大半を組織している。だから、私の取材の自由も労働者の力で守られた。だが長崎三菱では、そうはいかなかった。「危険」を理由にした、車の中からの見学、これが長崎における市民的自由の現実である。「守衛をみれば、その会社の態度はすぐわかります。三菱の守衛ほど、威張って官僚的な態度はなかくです。船の修理の時、われわれにうどんをとってくれる。その時のうどん屋への口のきき方は何時までに持つてこいといった、命令口調ですからねえ」

三菱で船を修繕したことのある電々公社職員がこう話してくれた。とにかく、三菱の権威はあらゆる人たちに貫徹する。記者や作家だけでなく、国會議員や法務局さえ、三菱の調査は自由にできないのだ。現に、分会が会社の人権侵害を人権擁護委員会に訴えているのだが、会社側の非協力的な態度で、遅々として調査は前進しないのである。

なにしろ、長崎では、常に三菱が仕事と生活の拠りどころであり、若者たちがチャホヤされ、気に入らなければ、点々と仕事をかえることのできた、高度経済成長期の最中でも、入ってくる労働者はいても、大量に若者がやめる現象はおこらなかった。石川島播磨あたりでは五千人入社して、六千人やめるような状態があったけれど、三菱では、その頃、若者が大変な運動資金を使つて、頭を下げて、入社させてもらうことさえ行なわれていた。

3 治外法権下の思想と行動

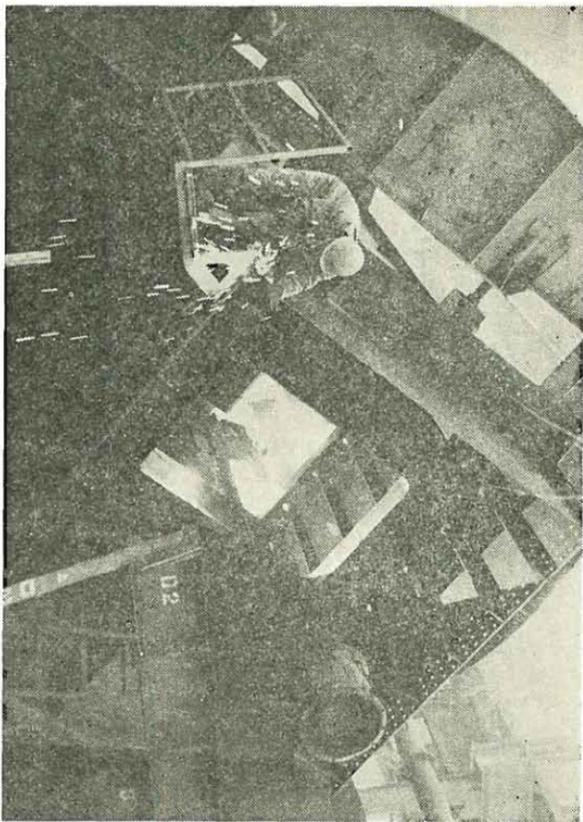
——その実態をつくっているもの

私は、まず、三菱が社員や家族および、地域におよぼしている実情をつかむために、できる限り大勢の人たちに会って話をきくところから仕事を始めた。

第一に、全造船分会員にたいする差別の実態——つきつきに会った長崎だけで百五十人ほどの人たちが（函館など全国では、四百人以上の人から話しを聞いた）あらゆる形の差別の中身を語ってくれた。おそらく、三百五十人の組合員全員が、職場・地域をとわず、有形無形さまざまに差別を三菱の意志によって受けていることは間違いない。そのうち、とくにひどい形の差別を受けている人たちが、前述の近松氏を先頭に、三十名連名で、法務局に人権擁護の訴えを提出している。さらに、賃金差別、昇給昇格についての差別は、全組合員の調査を出発点に組合の総力をあげて、弁護団と協力して、現在、法廷闘争、地労委闘争を行なっている。この人権差別・賃金差別とたたかう二大闘争がどのようになっていくかが、大変重要な段階にきているし、このなりゆきいかんでは、今、世界の造船不況の中で、ヨーロッパ諸国から、ひどい船の値段のダンピングなど、世界市場支配のためのあくどいやり口をとわれている日本Ⅱ三菱帝国が、国内的には、完全に押えていた労働者支配の足下が不沈母艦三菱の神話とともに崩れ始めることになるかもしれないのだ。

は、中小企業などに現われる暴力的性格はあらわれていない。一見つかみどころがない。だが、注意してみると、三菱企業内はもちろん、長崎市周辺から県下一体にまでおよぶ生活圏の中に、三菱の「差別」支配の現象が具体的な形となって、あらわれているのだ。

三菱に睨まれたら、大手企業はもちろん、どんな小さな関連企業にも就職できないし、官公庁にも入りにくいという状況は、長崎でのごく一般的な常識である。そして、就職はもちろん、あ



鉄と火花——造船現場は危険がいっぱいだ

私は、調査をすすめていく中で、三菱の労働者支配、差別支配の深さと拡がりの大きさに驚くばかりだった。

さまざまな労働者の分裂差別支配が現在、各地各企業で進行中だが、三菱の場合、少なくとも、表面に

らゆる生活行動に、その被差別状況はじわじわとひろがっていく。そして、その差別支配のもたらす被害は、分会員や活動家に限らず、その周辺にいる広範な人びとにおよび、差別する側に立たされる人たちにも、恐怖の支配が浸透していく。

まず、分会員にたいする差別の基本は、賃金と身分上の差別から始まる。実態は、じっくり紹介することとして、とにかく、この差別は、例外なく、三百五十人の分会員および、その他、民社党の選挙を熱心にやらないなど忠誠心を少しでも疑われたり、あるいは創価学会員のように会社の氣に入らない要素のある労働者のすべてにおよんでいるということ。ここに、労務管理による差別体制を作りあげた、三菱帝国の新しい労働者支配の原則がある。

仕事上の差別、そして、人権にかかわる差別——これも、実にさまざまで、複雑な形がある。新労の組合員が、分会員にたいして職場でものをいわないことから始まって、秋の九州を襲った台風の時には、崖崩れの被害を受けた分会員が近所の新労組合員の家に助けを求めたのに、すべて拒絶される悲劇さえ起こったのだ。

分会員にとって、極めて影響の大きい差別に、結婚と就職の差別がある。分会員の数少ない副作業長（最も下級の職制）の一人として、停年まで頑張った柴田さんの場合をみてみよう。この人は、大変仕事もでき、優秀な現場指導者として、差別されながら会社にも新労幹部たちにも文句をいわせない職場生活を送ったが、一番辛かったのは、子どもや血縁を襲った就職差別だった。娘さんは高校卒で某銀行を受け、最終審査まで行ったのに、はねられた。親の生き方が影響しないようにと、できる限り気を使っただけだ。自衛隊から帰った息子さんの場合

は、造船所の訓練生を目指し、三菱の大先輩をたのみ、一切、親と切り離して入社できるよう、あらゆる努力と方法をとったけれど、試験だけ受けさせて、後はなしのつぶてだった。

また、甥が、三菱関連企業の菱工業に入社することになって、柴田さんとの関係がわかってダメになり、弟に怒鳴りこまれて「兄貴は、三菱で、どげん、悪かことをしとるか！」といわれ、大喧嘩になったこともあった。柴田さん一族は、いやでも三菱と縁を切らねばならず、こうしたケースは珍しくないのだ。「分会員の親戚縁者とわかれば、三菱関連企業でも入社できない」——この現実が、他に就職のあてのない長崎市民に与える恐怖感の重みは、外の人間には想像できないほど大きい。

新労組合員は、嫌われると、もっととみじめな無権利状態で、首を切られてしまう。「日付けなしの退職届」を、作業長に書かされ、いつでも、勝手な時に、自発的に退職した形で追い出されるのだ。

分会員にたいしては、さすがに、首切りまでは、今のところやらない。周りの弱い人たちが犠牲にされ、下請け労働者や新労組合員が、闇から闇で、消されていく。時には、せい一杯、三菱の差別管理の一線をひきうけてきた、作業長副作業長クラスの年輩者たちが、停年までおいても、首切り以上に残酷な零細企業のお門違いの仕事に向向を命じられ、泣きながら止めていく人たちもいる。このケースは、さらに増えていきつつある。

三菱は、こうした、日常的なケースだけでなく、たとえ、生命にかかわるような事件や状況でも、三菱の名誉利害にかかわる時には、容赦なく、その力をふるう。

六年前、性能試験中のタービンが爆発し、破片が工場の屋根をつき破り、付近の住宅地域に落下し、市民一人の死者をふくめ、合計四名の死亡者と五十九名の重軽傷者を出した大事故があった。その時の犠牲者、森繁夫さんの奥さん、敬子さんは、今、ある学校の給食係として働きながら夫の意志を継ぎ、一人娘の由似子さんを育てている。

ここにくるまで、分会執行委員だった繁夫さんを奪われた日から、女一人、さまざまな力とたたかってこなければならなかった。なによりも、三菱の意志とたたかい抜く努力が一番大変だった。

彼女のめんどろを見つづけてきた、前長崎地区労働組合協議会の議長である吉田強氏がその間の事情を話してくれた。

「三菱は、彼女を寮母として、備うというわけです。しかし、それを受けるためには、会社の災害責任を追及する裁判などは、一切、やめるということでしょう。会社直接でなく、家族の中からも、彼女が分会員の妻らしく会社を追及することはやめるようにいわれます。家族にも、三菱社員や関係者がいるわけです。私は何度も話しあいました。森君の死をムダにしない道を一緒に考えました。とにかく、三菱の傘を離れて、母子生きて行く道を探したのです。私の知り合いを通じて、こっそり、学校に就職させることができました」

私は恐しくなった。長崎地方の労働組合運動の幹部であり、労働委員会の委員である人さえ、災害で亡くなった分会員の妻を、会社の妨害が入らないように、そっと就職させなければならぬという、この恐しい三菱の力。

三菱の力と、三菱重工労組（全日本労働総同盟全国造船機械労働組合連合会三菱造船労働組合長崎造船所支部）幹部の企業との一体関係を、はっきり見せつけてくれた事件が、最近発生した。事は、一昨年八月、進行しつつある不況合理化にそなえて、三菱関連企業に働く下請労働者が、自らの力で生活と権利を守るべく、非公然に三菱長崎造船下請合同労組を結成した直後から始まる。間もなく、八月下旬から、各関連企業で非公然で合同労組に加盟した組合員が、つぎつぎと経営者に呼び出されて、脅迫されたり、組合員の情報を求められ、脱退を強要される事態が発生した。そして、合同労組の副委員長である不動建設従業員、本多昭三氏が解雇されることになった。

関係者があまりに早い会社側の弾圧開始を不思議に思い、調査をすすめていくうちに、意外な事実が判明した。

下請け労働者の組織を、三菱と関連企業に売り渡した張本人は、三菱重工労組（新労）委員長の小淵正義氏であったということ。

つまり、小淵氏は同盟三菱を代表する長崎地方労働委員会の労働者委員であって、同委員会に合同労組が法人登記の申立をした時の組合員リストを職権で入手し、同盟系の関連労組協議会幹事会の席上で発表したのである。その後、関連企業の経営者と三菱が、この事実をつかみ、合同労組組合員にたいする弾圧、首切りが始まったということである。

この点を関係者に指摘され、新聞にもとりあげられると、新労のピラで『当然のことをしたまで』と書き、小淵氏自身が記者会見の席上でつぎのように入った。

「合同労組結成は重工労組としても重大な関心を持つのは当然であり、いわば私自身重工労組委員長と地労委委員の『二重人格』を持つのはやむをえない。合同労組が秘密に活動するのなら、地労委に役員名簿を出すべきでない」

この人の言葉を、居直りなどという、簡単な言葉で片付けるわけにいかない。どのように言いわけをし、理窟をつけようと、この人の情報をもとに三菱長崎に働く下請け労働者たちが、やっとな自分たちの力で育てた労働組合を経営者の攻撃にさらし、その幹部を首切らせたという事実は変わりはないのだから。

さらに、新労の機関紙「だんらん」本年二月一日号を見ると「正当な小淵委員の行為」「ネライは地労委私物化」と書き「これら無責任な左翼集団や報道のあり方について、名誉毀損、損害賠償、告訴などを考慮しています」と宣言している。

そして、驚くべきことに、この事件を報道した朝日新聞に難くせをつけ、偏向新聞だとして、不買運動を新労組合員や社内呼びかけ、同時に、唯一の良心的な新聞として「サンケイ」新聞を読みましようの運動を展開したたのである。ある新聞記者の情報によると、この運動の結果、サンケイ新聞の購読者が、長崎市内で八百部増えたという。

私は、三菱帝国の差別支配の全貌が少しずつわかってきたように思えた。つまり、一言でいうならば、三菱の差別支配の特徴は、まことに組織的であり、日常的であり、体制そのものとなっているということではないか。その『組織的』のなかには同盟重工労組の重要な役割りも含め

て。だから、三菱社員の意識構造そのものの中に差別のエネルギーは強く根深く存在しているはずだし、社員教育研修の思想の中には、それをとく鍵が存在しているはずだ。私の追求する目標がやっと明らかになってきた。

4 巨大な三菱の傘のもとで

——あの日から生まれた亀裂

「……今までは、長崎の人間は、なにがあっても三菱のことはいわないということできまして」

秋の午後、私は、新聞記者のUさんから三菱について話をきいた。小さな喫茶店だが、コーヒーはうまいし、パロック音楽の音量は心地よかった。

「この厳しい不況の中で、少しずつ、本音を口にする傾向が見えますけれど……なにしろ長崎の人間は長い間、たえてきましたからねえ……鎖国以来、権力の下でたえてきた宿命的なものがあるんでしょねえ……」

全くその通りだなと私は思った。私がかかされる会社内での差別、家庭や地域まで支配する企業力——少なくとも、東京や大阪の市民感覚からすれば、一声で決着をつけられるようなものが、この町の中では大手をふってまかり通っている。たてまえでは、「三菱は横暴だ」ということがまかり通っても、生活の深部では、三菱にたてついたら生きていけないという法則が、長崎

の労働者と市民の意識を強く深く支配しているのだ。

「なにしろ、戦争中には、長崎をとりまく丘から、何をつくってるかわからないように、覆いをつくって、例の戦艦武蔵をつくったんですからねえ。見ざる・聞かざる・言わざる、長崎の人間はどんな時代でも、三菱の意志イコール日本国家の意志の下で、働きつづけてきたんです」

現全造船労働組合委員長の畑田さんは少年工として、三菱に入社し、この武蔵建造の仕事をし、進水にもたちあつた一人だが、進水後、佐世保まで回航する時には、長崎市民は雨戸をしめ、見ることも許されなかったという。

三菱は国家なり——私は、この言葉をききながら、三菱正門の守衛のなんともいえず、自信に満ちて人を威嚇する、あの視線を思い出していた。

現在、三菱重工業を含む三菱コンツェルンは日本最大の資本額と売上高を誇っている。

そして、とくに三菱重工業を中心とする重工業トラストの占める位置は大きく、なかでも船舶を軸に機械、航空機、兵器など、軍需生産とかかわる部門で、他の企業の追隨を許さない力をもっていることは、明治維新以来、日本国家の援助と力で発展してきた「三菱」の伝統と力を物語っているといえる。ほんのちょっとした一例としても次のようなデータをあげることができる。

付1 わが国航空機工業における当社(三菱の意味)の地位、主要六社の最近三ヶ年間の売上高比

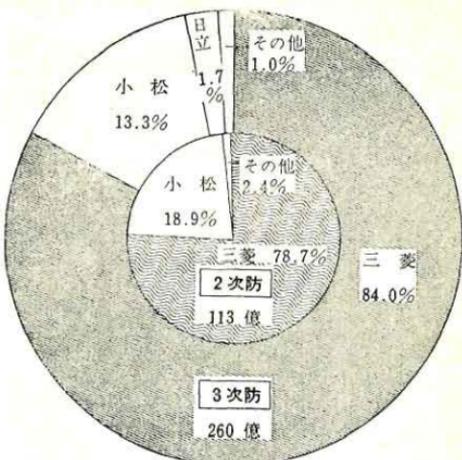
三菱重工	三七%(機体及エンジン)	富士重工	七%(機体)
川崎重工	二八%(同 右)	新明和工業	七%(同右)
石川島播磨	一六%(エンジン)	日本飛行機	五%(同右)

序章 三菱は国家なり

付2 日本大手造船会社の進水量

会社名	年	
	一九七二年	一九七三年
三菱重工	隻数 三九 G T 二、六八四、七六〇 % 二〇〇・九	隻数 四八 G T 三、二九九、八〇三 % 二一・一
石播重工	隻数 四二 G T 二、〇五八、七四〇 % 一六・〇	隻数 四一 G T 二、三〇二、二一九 % 一四・七
日立造船	隻数 二九 G T 一、四一一、四二六 % 一一・〇	隻数 二七 G T 一、四四七、四五三 % 九・二
三井造船	隻数 二二 G T 一、二一四、〇九八 % 九・四	隻数 二五 G T 一、五一一、七〇六 % 九・六
日本鋼管	隻数 二〇 G T 一、一八〇、〇九九 % 九・二	隻数 二〇 G T 一、一九〇、二九二 % 七・六
佐世保重工	隻数 六 G T 四七二、二五七 % 三・七	隻数 六 G T 六二三、五八三 % 四・〇
川崎重工	隻数 一六 G T 一、〇八四、九四一 % 八・五	隻数 一七 G T 一、三三八、八四四 % 八・五
住友重工	隻数 九 G T 五九五、一〇〇 % 四・六	隻数 一二 G T 九四六、〇〇〇 % 六・〇
合計	隻数 一八三 G T 一〇、七〇一、四二二 % 八三・四	隻数 一九六 G T 二二、六五九、九〇〇 % 八〇・四
日本総計	隻数 一 G T 一二、八六五、八五二 % 一〇〇・〇 (四八・二)	隻数 一五 G T 一五、六七三、一一五 % 一〇〇・〇 (四九・七)
世界総計	隻数 一 G T 二六、七一四、三八六 % 二〇〇・〇	隻数 三一 G T 三一、五二〇、三七三 % 二〇〇・〇

(注) 三菱重工の()表示のシェアは世界に占める当社のシェア



付3 特殊車両の当社シェア

(戦車、装甲車、榴弾砲、けん引車、浮橋など)

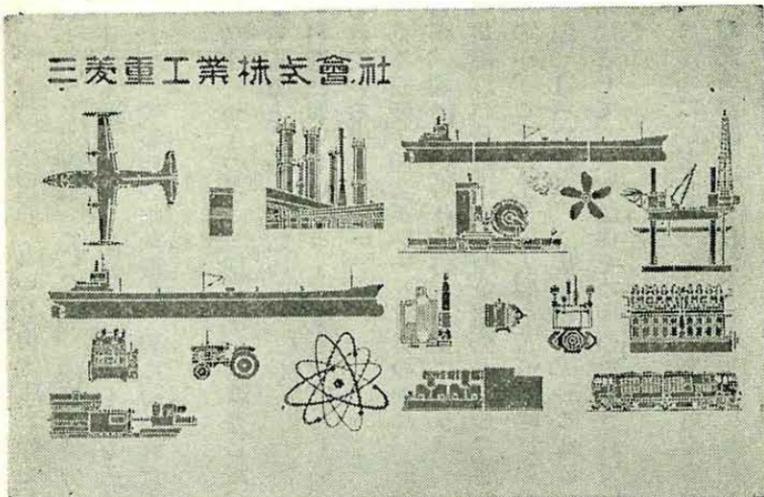
も道路も、すべて、三菱優先であること、工場の受ける恩恵が大きいこと、などなど、現在進行中の外環状線の道路計画も、結局、三菱香焼る。県政、市政とも、三菱とのゆ着関係が強いために、開発その他、三菱に恩恵をもたらすために使われる財政が後をたたない。

つい最近も、市の下水道処理場に三菱製品の脱水機（一億三千万円）が入ったとか、木鉢焼却

船舶生産量日本一、そして、一〇〇万トンドックをもつ長崎造船所は、名実ともに、世界一の造船所であるし、航空機も日本一、そして、戦車など、軍用特殊車両の生産シェアは、なんと第三次防衛計画の八四％にも達したのである。「不沈艦」と呼ばれ、「重工」が沈没するときは、日本が倒れる日」とまでいわれる、三菱重工。この三菱の巨大な発展のたびごとに、長崎の町は変わってきた。七〇年代の世界一の造船所づくりのためにも、いろいろのことがおこった。

新しいドックをつくるために、川をつぶし、山を削り、香焼工場をつくるために自然も祖先伝来の墓地も、おかまいなくつぶされた。漁師の漁場をだめにしたこと、周辺の土地を安い値段で買い占めたこと、水

三菱重工業株式会社



航空機，原子力から飲料自動販売機まで

場の焼却施設（六〇億）も、三菱と市が契約しているなど、政治経済の中心部分に三菱がどっかり腰を下し、まかり通っている姿は、ロッキードなどが賄路などを使ってこそそそやるやり口でなく、まさに、長崎の支配者ということであらう。

長崎の店には「三菱指定店」の札が、ぶらさがっているのが目につく。ある商店主にきいたら、

「ええ、とにかく、長崎の町で商売するための鑑札か、しょ場代みたいなものです。これでもうかることはなくてもねえ、ほかの札を貼るわけにはいかないんですよ」

商店にとっても「三菱」を名のる札をかけているかどうか、踏み絵の役割を果たすというわけなのだ。地区労の吉田さんが、この点についても裏付けてくれた。

「そうです。私たち地区労の組合員の便宜も考

えて、地区労の店」という指定店を作ったんですが、辞退する店ができてねえ、結局、三菱にたいする気兼ねなんですわね。地区労協力店より、三菱協力店の看板が必要だということです。土地も水も空気も品物も、なにかも三菱とかかわらずに暮らしていくことは、この町ではできない。喫茶店の掃除機も、表におかれた車も、すべて、三菱製品だった。

私は、つぎつぎに、見聞きし、調査した、三菱に働く労働者やその周辺で生きる人びとの実状を考えるとところから始めた。

「料理はおいしい。コーヒーもすばらしい。海も山も美しいけれど、こんなにも人間が痛めつけられている街も少ない」

ある三菱労働者がいった言葉の中に、三菱をめぐって日々繰り返されている、人間の葛藤の性質が、端的に語られているように思う。

馬蹄形の長崎港の片側を完全占領し、港の入口もおさえている三菱長崎造船所——この姿そのものが、ここに生きる人間の苦悩の性質を象徴していることは間違いないけれど、政治や経済の支配、自然の破壊、公害という、形にあらわれた被害の側面とともに、社員として、あるいは、市民として、人間関係そのものを侵されている被害の側面が、今、大きく浮かびあがってきたのだ。

「こんなにひどくなったのは、あの組合の分裂の時からですね」
U記者が語ってくれた。

「それまでは、それほどでもなかったんですか?」

「ええ、あれ以前、分会の力が強くて、労働者が自由にものをいってたところは、取材も苦勞しなかったし、三菱へも、自由に入入りでできました。あれからですね、監視が厳しくなり、われわれも神経をとがらし、労働者の顔も暗くなったのは……」

「あの組合の分裂の時」とは、もちろん、昭和四十年の十二月から翌年一月にかけて、三菱と分会内の一部分裂勢力とが一緒になって全造船分会にたいして仕掛けた日本労働運動史上でもまれにみる、すさまじい組合分裂攻撃のことをさしている。

「あの日から職場が暗くなった、取材も自由にできなくなった。会社と重工労組が、兵器生産を大っぴらにいうようになった」

一人のジャーナリストのこの見方の中に、私がぶっつかった三菱と長崎の異常な世界をとらえる視点があるように思える。

今は、鎖国時代の長崎でなく、戦後、民主主義の国日本であるとすれば、人びとが沈黙し、耐えさせられるのも宿命とあきらめる前に、人間が権力と資本の力で屈服させられる道筋を明らかにし、彼等のやり方をつきとめることも可能なのだ。

私たちは、今、冷静に、三菱のやり口を明らかにし、差別支配の考え方と現実をつかむことが必要である。十年のやり口の中に、彼等の狙いも方法も実力も、全部、出ているはずだ。そして、そのやり口で、痛めつけられじっと耐えてきた人びとの体験も、十年積み重ねられたということは、もう、意地やゴケの頑張りではない、人間の人生をかけたたたかいであり、労働運動が

人間の生きることそのものになったことを意味しないか。

私たちは、今、三菱が分裂以後、労働者になんをやってきたかを、えぐりだすことから、始めよう。分会組合員三百五十人の十年を考え、三菱労働者の十年を考え、今、私たちが三菱にたいして、なにをしたらいいかをひきだすところから始めよう。